第 14章 『互いの友』 腕力と知力——欲望と階級 _{宮丸 裕二}



「ハゲタカ」(第1部第1章、マーカス・ストーンの挿絵、初版)

中期における肉体性のあり方の一側面を明らかにしたい。 暴力との関係を考えてゆく。 ある。本稿では、ディケンズが、そしてヴィクトリア朝中期の ならば、本小説は、 ているし、傷害という暴力の結果も頻出し、また、社会的抑圧 場する暴力はこれに留まらない。日常生活の至るところに習慣 暴力シーンとしておそらく誰もが想起するのは、 している。本稿で扱う『互いの友』という作品に現れる代表的 問わず暴力をふるわせて物語の展開やクライマックスを作り出 を通じて見えてくる、ディケンズに代表されるヴィクトリア朝 いたのかということの考察から始め、中でも中産階級における 人々が、各階級と暴力との関係とをどのようなものと見なして や自制によって実施されなかった潜在的な暴力にも目を向ける として蔓延する細かな暴力の反復をディケンズは省かずに描い ンがレイバーンを襲撃する場面であろう。しかし、本作品に登 ディケンズという作家は、 暴力シーンを用いており、登場人物の敵味方の位置づけを 各章、各葉に実に暴力が遍在しているので 最終的に、ディケンズが描く暴力 初期から晩年まで多くの作品の中 ヘッドストー

0)

資料を提示してくれる作品なのである。

第 節 階級と肉体の結びつき

点で、ディケンズの数ある小説の中でも異例である。労働者階 個人ではなく集団を形成したかたちで、社会ごと描かれている 『互いの友』 は 幅広い階級の人物が登場し、 しかもそれが

> とってはこの階級もその慣習も飽くまで後天的に知り得たもの し出すものであり、ここで扱う暴力ということについても多く ディケンズがそれぞれの階級について持っていたまなざしを映 も知りうる限りでそれぞれの階級集団を登場させた本作品は、 であり、 しても作家として多くの知人友人を得ているが、ディケンズに 摘している通りであるし(House 218–19)、また、 知らなかったというのはかねてよりハンフリー・ハウスらが指 級の人物を初期より多く描いてはいるものの所詮はその階級 知り尽くしたとは労働者階級以上に言い難い。 上流階級に それで

0) 場人物の大半に暴力的な言動が見られ、それが一つの所属階級 中に暴力が蔓延していることが分かる。 のボートの足かけでお前の指をかっ切るか、それとも鉤竿でど に縁を切ろうとするヘクサムは、どこかへ失せないならば ある。ライダーフッドが盗みを働いた廉で前科者となったため ヘクサムとロジャー・ライダーフッドとの会話は既に暴力的で 証しにさえなっているのである。 まず、本作品での労働者階級の描かれ方を見るとき、 物語冒頭より、ギャファー・ 労働者階級に属する登 日常 0)

0)

価値基準が提示されているものの、

その基準に照らして道を

正義

に倫理的に正しい行いと正しくない行いとに関する一つの 頭を貫いてやろうか」と脅す(第一部第一章)。冒頭ながら既

相で娘のリジーに対して怒りを露わにし、息子に対する報復を相で娘のリジーに対していたナイフをテーブルに突き刺す。一方で、 ライダーフッドはミス・アビー・ポタスンの経営する酒場「六人の陽気な仲間たち」亭を訪れるが、その前科のためにこの居で置の「法律」であるポタスンに門前払いされて、やはり捨て台詞として物騒な脅し文句を口にするし(以上、第一部第二音)。これらの各場面ではライダーフッドのみならずへクサムにも容疑のかかる殺人という話題が背景となって 物騒なものになっているということもあるが、一方で、そうし 物騒なものになっているということもあるが、一方で、そうし た話題が出てくる以前の段階でも乱暴な物言いや暴力的な振る た話題が出てくる以前の段階でも乱暴な物言いや暴力的な振る た話題が出てくる以前の段階でも乱暴な物言いや暴力的な振る た話題が出てくる以前の段階でも乱暴な物言いや暴力的な振る た話題が出てくる以前の段階でも乱暴な物言いや暴力的な振る おいま に対しているということもあるが、一方で、そうし ない アビー・ボタスン に対する報復を おいま に対しているというによりに対しているというによりによっている。

リーが勉学のために家を出て行ったことを知ると、恐ろしい形

舞いの中で生活がそもそも営まれている社会が描かれているの

である。

が、そうした暴力や危険と背中合わせで生きている人々なので

れの欲望が現れていると言えるのである。

間もなくヘクサムは死体として引き上げられる

受け継いだニコデマス・ボフィンとそこで本の朗読役として雇て登場するのは、ごみ処理業によって財をなしたハーモンから残された資産をめぐる人々の構成する社会である。テムズ川で残された資産をめぐる人々の構成する社会である。テムズ川で残された資産をめぐる人々の構成する社会である。テムズ川で残された資産をめぐる人々の構成する社会である。テムズ川で残された資産をめぐる人々の構成する社会である。テムズ川で

われることになるサイラス・ウェッグとの関係は、その出会い

0) ウェッグも、結果としては双方相手に騙されることになる。 0) 始まっていて、後に暴力となって顕在化することになるそれぞ れぞれの狙いに基づいた探り合いや駆け引き、騙し合いは既に らくる互いのずれはここではコメディとして現れているが、 うした意味では、陽気にしてユーモラスに描かれるその出会い てボフィンの手にある資産をかすめようと画策して失敗する グを「文学者」として雇用して家に入れたボフィンも、 考えるウェッグの欲望である。そして、識字さえ怪しいウェッ えようとするボフィンの欲望と、 大金を築いたから次は教養を身につけて夫妻の社会的体裁を整 会いの場面には既にそれぞれの欲望が現れている。具体的には 防から暴力的な行為を含む激しいものに発展してゆく。 て快活ではあるものの(第一部第五章)、やがて騙し合いの攻 場面において、会話がどうもちぐはぐでかみ合わないことか 場面こそウェッグがそらんずる民謡も助けて、 大屋敷に取り入って一儲けを 実に陽気に

いた露店で売っている物は果物から菓子や本まで、およそ全ていた露店で売っている物は、そうした暴力に見合う階級、やれに見合う言動とあわせて当初より描かれているのである。で思われ」、「成長障害でもう片方が義足になり損ねたよう」とに思われ」、「成長障害でもう片方が義足になり損ねたよう」とに思われ」、「成長障害でもう片方が義足になり損ねたよう」とに思われ」、「成長障害でもう片方が義足になり損ねたよう」といた露店で売っている物は果物から菓子や本まで、およそ全て、溶った。

みを募らせて、「鼻を石臼に押しつけて」やり、「馬具を取りつ われたジョン・ロークスミスを疎ましく思い、ボフィンへの恨 接的な暴力行為が見られていないとしても、暴力を自然にふる 特性としてそうなのである たために「乳離れして以来ずっとおが屑ばかり食べさせられて その自覚があってか、ボフィンの前で夜ごと本を朗読させられ る遺産』でディケンズは繰り返し労働者階級と結びつけながら、 硬い物質に言及して、例えば『ハード・タイムズ』や『大いな ŧ の印象を与えるものかも知れないが(あるいはそうではないか あるいは水分の欠如は、そのものとしての誰にとっても無骨さ 重要なのである。その後、 属性であるとディケンズが考えて描き込んでいるということが い得る者の、 と乾きとがウェッグの特徴として描き込まれているが、 きたような声」になってしまったと本人は言うが、元々の人物 はがらがら声で笑う者と形容されており(以上、第一部第五章)、 再三それが「硬い」ことを強調するのである。また、ウェッグ いうものはとりわけ労働者階級の人やその生活に対応する一つ 固定化したイメージなのである。金属や木材をはじめとする 知れないが)、ことディケンズの執筆においては、「硬さ」と 硬く干からびたものばかりだ。ここに用いられている「硬さ」 あるいはその所属階級の特徴として似つかわしい ウェッグは、自分よりも好待遇で雇 (第二部第七章)。 ここにも、 未だ直 硬さ

> ことで体現されていると言えるだろう。 Ł う (第四部第一四章)。 ウェッグは必ずしも暴力の加害者では れ グは暴力の餌食となる。ボフィン邸を訪れるなり、 ない場合でも暴力の当事者には十分なっている。 ロッピーの手でウェッグは、ごみ収集の馬車に捨てられてしま 帽子を戸外に放り投げられ、首のスカーフを掴まれ揺さぶら 況が変わってウェッグとボフィンの立場が逆転すると、ウェ なイメージだけをウェッグは負っているのである。 れない。その点で、上に言うとおり、暴力を今にもふるいそう ならして暴言を吐くけれど、実際に相手に手を上げる機会は訪 フィンの歩みに遅れてしまう。 するくらいである するのは、ボフィンが歩き回る間、 ウェッグにまつわる暴力的世界とは実はその被害者になる 頭を壁にぶつけられ、また揺さぶられている。 (第四部第三章)。 暴言を吐いて、義足で床を踏み 腕を捕まえて拘束し、 それでも義足のせい そうしてみる 被ってい でボ ス

に正義があり、ウェッグが悪党であるという倫理規範を度外視罰的な采配を行っている。先の通り、ハーモンやボフィンの側とではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったくない。ボフィンは目の前の暴力を是認しているとではまったが、ハーモンとしての正体を明かしたジョン・ロークスミスでン・ハーモンとしての正体を明かしたジョン・ロークスミスでン・ハーモンとしての正体を明かして暴力をふるうのはジョン・ハーモンとしている。

ゆすり、

精神的に追い詰めるが、実際にウェッグが腕力を行使

け締め上げて、

章)。遺産の行方を変更し得る証書でボフィンをいいように手綱で操ってやる」と目標を掲げる

(第三部第一四章)。

従関係ではあっても、親方は「ぎりぎりの低賃金でこき使い」、語って余りあるのである(第一部第八章)。敬意を抱き合う主

叱責し、罵倒する」日常は大前提であり、

飽くまでその中で

るのである。ボフィンが暴力を含む腕力の世界に所属しているない。ボフィンが暴力を含む腕力の世界に所属しているをとべつの愛情を試すための一つの演技としてボフィンは召使いたべつの愛情を試すための一つの演技としてボフィンは召使いとべうの愛情を試すための一つの演技としてボフィンは召使いとべうの愛情を試すための一つの演技としてボフィンは召使いたいる場面でもあるのだ。実際、ボフィンに先んじて労働者階級に生まれてやはり身一つで地位を築いた亡き親のハーモンとない。まれてやはり身一つで地位を築いた亡き親のハーモンとない。よいである。ボフィンが暴力を含む腕力の世界に所属している場面でもあるのだ。実際、ボフィンに先んじて労働者階級に生まれてやはり身一つで地位を築いた亡き親のハーモンとのである。ボフィンは正古などのから、またいとない。

め

荷物の方であんたを恥ずかしがるだろうさ」と言おうとして止ていて「あんたが荷物を持つのを恥ずかしがらないにしても、

ウェッグに対していわゆる「ののしり言葉」を口にしそう

ちながら至って平和的に振る舞う人物である。ナスは、「無害な厭世家」と言われるとおり、

憂鬱な性格を持

ウェッグと話し

してみるならば、

ボフィンもウェッグも共に暴力的な世界に

い

[章)。 体ごと持ち上げて放り投げることもあるのである(第三部第八。 るし(以上、第二部第七章)、ウェッグの行動を抑えるために

グが椅子からひっくり返るほどの「意図せぬ」

威嚇行為を見せ

向にある。しかしそれでも、椅子から腰を上げただけでウェッになって止めと、相手を刺激することや争うことを回避する傾

を築いて落ち着いた現在の背景に暴力的世界があったことを物ら誤ってボフィン夫人を殴りつけてしまったという逸話は、富取り上げて放り投げ、頭に来たボフィンが親方を殴ろうとしたえ、親方はボフィンに「悪態をつき」、ボフィンは親方に対しえ、親方はボフィンはは親方ハーモンの息子のことであるとはいの間にも、ボフィンは生前は大いにぶつかり合う暴力的な主従の間にも、ボフィンは生前は大いにぶつかり合う暴力的な主従

タスンは従業員のボブ・グリバリーに指示を与えるとき、しっなスンは従業員のボブ・グリバリーに指示を与えるとき、しったしかねないもめ事が起こるというだけではなく、ディケンズが労働者が構成する社会階級集団を描くとき、その世界ごと暴力という肉体性の備わったものとなっている。ボフィン夫妻の馬車が出かけるときには近所のとなっている。ボフィン」と煽るため、この無礼者を腕に物ごみ出ししてよ、ボフィン」と煽るため、この無礼者を腕に物ごみ出ししてよ、ボフィン」と煽るため、この無礼者を腕に物ごみ出ししてよ、ボフィン」と煽るため、この無礼者を腕に物ごみ出ししてよ、ボフィン」と煽るため、この無礼者を腕に物でみ出してよ、ボフィン、活気溢れる若者が「金持ちのボフィン、潜したというだけではなく、アビー・ポ展しかねないもめ事が起こるというだけではなく、アビー・ポ展しかねないもめ事が起こるというだけではなく、アビー・ポタスンは従業員のボブ・グリバリーに指示を与えるとき、しっなスンは従業員のボブ・グリバリーに指示を与えるとき、しっないうだけではなく、アビー・ポートを持ちない。

かりやれという意味を込めてその髪を引っ張って頭をごつごつ



しかし夜勤の警部は、

めき散らし、独房の扉に体当たりしている」音が聞こえている。 が警察署を訪れると、執務室の裏手から「酔った女が激しくわ

修道士さながら

るためにヘクサムに案内されてレイバーン、ライトウッドと 伐とした音が響いている。テムズ川に上がった死体を確かめ を見せているのである。さらに、こうした世界の背景には、 境の一部となり、今現在までに行われた暴力の結果として世界

(ジューリアス・ハンドフォードに扮した) ジョン・ハーモン

フィンのお通り」(第1部第9章、 ストーンの挿絵、初版) 日常にある喧噪。

離といった加工がなされたことのまさに痕跡である。

て接続された身体の記録の集積が、

そのまま取り巻く自然な環

切断され

切断といった危害が加えられ、 製と人間の骨の数々は、 ウェッグの義足は、 置かを問わずなんらかの切断があったことだけは疑い得ない。

そして、ヴィーナスの工房にある動物の剥

人間を含む生命の身体に傷害、

その後に切除、

芟ね 除、

理由はどこにも触れられていないが、

いるのである。そして、

と壁にぶつける(第三部第二章)。2

ここに至ると、こうした暴

力行為は憎しみや攻撃的意図とは関係しないところに存在して

ウェッグの片足が義足であることの

過去に事故か病気か処

と手順通りに線引き仕事を終えてしまった。女が、いよいよ激 しく扉に体をぶつけては、 (まるで祈祷書に解説を施すときのような静寂さをもって) 猛烈な金切り声であいつの肝臓をよ

こせと叫んでいることには、いささかも気に留めない様子であっ (第一部第三章

確かに活発である。

喋り続け、

豪勢な装いと暴飲暴食を強調して見せる(第一部第二章)。

L

ディケンズは特に中でもレイディ・ティッピンズの

ヴェニアリング家に集まった人々は陽気に

に集約されるものである。

レイディ・ティッピンズがモーティは、つまるところ社交の中での会話

その活発さと積極性は、

のも含め、日常の中に平然と溶け込んだものとして存在するの間見るのである。そこでは殺人などの凶暴なものに至らないも民とはいえ労働者階級をある種エキゾティックな存在として垣描かれており、小説の主な読者である中産階級は、これを同国つくものとして、また肉体性の実現こそが生活そのものとして

労働者階級の生活は、

時に暴力を伴いながら肉体と密接に結び

なく、それにつながる上層中産階級である。本作に度々章を割 階級である。尤も、『互いの友』に登場するのは上流階級では もって生活を営むものという伝統的な印象は根本で保持されて 表されるように上流階級は土地と結びつき、強靱なる肉体性を いて描かれるこうした上層中産階級の社交界において、 いざ戦闘となれば先陣を切って敵に向かう、 見れば終始ヴェールに包まれた、未知で不可解なものでしかな 流階級の典型像について言えば、 の中でどのような表象を与えられているだろうか。本来的な上 である。 いたはずである。 いものの、それでも、 暴力が中産階級よりも上位に属する階級はこの作品 自らの広大な土地を駆け回って狩りに興じ、 肉体性という観点から言えば、 その実態は元々中産階級から 野生としての上流 貴族に代 人々は

> トウッドは事務弁護士、レイバーンは法廷弁護士の資格を持ち 話のみを求め、生きる手段として社交のみに依存し、 だる様子は会話に飢えていることを示しており、うわさ話を求 に出して労働の美徳を説くボフィンに対しては、「ハチは働き 部第六章)、 えも飽きている。さらに、道徳というものが嫌いであり いる(第一部第三章)。レイバーンは仕事のみならず社交にさ おり、二人は共通して活力や行動力といったものをこそ嫌って ながら実務に携わった経験はなく、ただただ時間を持て余して と倦怠を代表するのは言うまでもなくレイバーンである。 には生活に飽きているのである。 らことごとく離れたところに生活があり、活発な中でも根本的 から結末まで一貫して不変である。言いかえれば、 め消費しながら社交が回ってゆくというあり方は、 マー・ライトウッドにうわさ話を聞かせるようにと積 何かに努力し励むことが嫌いで、ハチを引き合 そうした生命力を失った生活 小説の! 口頭 肉体性か 極的 での会 冒

も聞いて呆れるゲームなのである。ヘッドストーンの感情が乱引き回して、疲弊させ不眠症に至らせるという、ライトウッドことが伝わるので、いよいよ怒らせるわけだが、そのレイバーことが伝わるので、いよいよ怒らせるわけだが、そのレイバーことが伝わるので、いよいよ怒らせるわけだが、そのレイバーことが伝わるので、いよいよ怒らせるわけだが、そのレイバーのであり(第一部第八章)、その何も望まずすべてを退屈に思物であり(第一部第八章)、その何も望まずすべてを退屈に思

過ぎ」であってそれを真似るのは馬鹿げていると答えている人

産階級とは区別されているのである。

ない、行いとして相手を虐げてはいてもこれを暴力と呼ぶには、行いとして相手を虐げてはいてもこれを暴力と呼ぶには、行いとして相手を虐げてはいてもこれを暴力と呼ぶには、 の体が憔悴するのに対して、追われることを楽しむレイバー

第二節 暴力と知性に挟まれる中産階級

圧が描かれていることである。

正が描かれている労働者階級と、逆に肉体性やその結果としての暴説中どのように描かれているだろうか。作中の登場人物は過激説中どのように描かれているだろうか。作中の登場人物は過激説中どのように描かれているだろうか。作中の登場人物は過激説がある。しかし、このまで実に興味深いのは、いずれの場合にも常に潜在的な暴力に正が描かれていることである。

ひら右手のこぶしをねじり込んだり」し(第二部第一一章)、話しながら、顔を真っ赤にして、「歯を食いしばり、左の手の期間その怒りを我慢しても外面に現れざるを得ない。リジーとはなく、それはどうしても外面に現れざるを得ない。リジーとはなく、それはどうしても外面に現れざるを得ない。の中で何度期間その怒りを我慢してもいるのである。自分の心の中で何度期間その怒りを我慢してもいるのである。自分の心の中で何度期間をがある。

しているが、それを抑えるのには失敗している。(第四部第一章)。「私は感情の激しい人間なのです。...... だかライダーフッドと話しているだけで激しく鼻血を出してしまうやがて求愛の相手であるはずのリジーを怯えさせてしまうし、

作品に登場する中産階級で感情を抑えているのはひとりへッ作品に登場する中産階級で感情を抑えている。呼を吐き、そして時に凶暴性を見せるが、致命的な暴力はふる中でも休戦し、他を騙す共闘に切り替えるが、二人の関係は険中でも休戦し、他を騙す共闘に切り替えるが、二人の関係は険中でも休戦し、他を騙す共闘に切り替えるが、二人の関係は険中でも休戦し、他を騙す共闘に切り替えるが、二人の関係は険中でも休戦し、他を騙す共闘に切り替えるが、立とはなかった。お互いの騙し合いで結婚に至ったうムルも最終的にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩とかぎ煙草を的にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩とかぎ煙草を的にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩とかぎ煙草を向にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩とかぎ煙草を向にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩とかぎ煙草を向にはオールバニーでフレッジビーに対して、塩といるのはひとりへッ

第四章)。また、夫人と娘のベラとの関係にも常にいらいらが第四章)。また、夫人と娘のベラとの関係にも常にいらいらが極めて中産階級的なのである(第一部本たが決めるんでしょう。私の考えなどどうでも良いんですわ」なたが決めるんでしょう。私の考えなどどうでも良いんですわ」なたが決めるんでしょう。私の考えなどどうでも良いんですわ」なたが決めるがでしょう。私の考えなどどうでも良いんですわ」なたが決めるがでしょう。私の考えなどどうでも良いんですわ」なたが決めるが、この自分の欲望や主張を抑え込んだかたを言うのであるが)、この自分の欲望や主張を抑え込んだかた。実際、ウィルファー神的に安定が持続しているとは関係にも常にいらいらが

内在することへの恐怖は、

労働者階級であった前世の記憶に

らもどこかいらいらしっぱなしなのである(第四部第一六章)。 ことになったジョージとラヴィーニアとはやはり愛し合いなが らは一家に継承されていて、 ラヴィーニアに止められている(第二部第九章)。このいらい ジョージ・サンプスンも暴言を吐こうとしてすんでのところで あ フィンが語るに Ď, また、ライトウッドの弁護士事務所を訪れたときのことをボ 料理一つもしているとこれが喧嘩に発展するのである。 新たに家族として迎え入れられる

は、

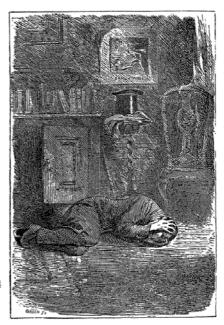
私が助言をもらおうと弁護士を探しにここらにやってきたら、 と声をかけてみたんですよ。(第一部第八章) ペンナイフで切ろうとしているのが見えたから、一つ、「おーい」 この階で、 あなたのところの若いのが敷居窓に挟まったハエを

る欲望とその抑圧はこの階級に広く蔓延しているのである。 えないかは偶発的な結果に過ぎず、少なくとも暴力の前段であ 部第一章)。みんな我慢しているのである。暴力に訴えるか訴 事をする服の心臓部分を針で突いてみることにも言える 師の座について労働者階級を脱したと思しきピーチャーが針仕 し、公然性を持っていないのである。同じことが、なんとか教 抑えられた暴力性は、 弁護士事務所に勤める下層中産階級に属する助手の、 ここに描かれる中産階級の抑えられた暴力性とそれが自らに ボフィンが語るほどすがすがしくはない 秘められ 第二

> た肉体性から知性へと生きる手段を変更しつつ相手への攻撃性 型的に現れているし、勉学をもって恐らく労働者階級であるこ うヴィクトリア朝に長く育ってきた認識が勿論背景となってい 性など問題にしていない点で中産階級と大きく異なっている)。 を消していない姿をそのまま見せている(第二部第一五章)。 あるはずの姉のリジーを説得しつつ、論破する様子は、 習ってきた言葉と論理を武器にチャーリーが本来出自が同じで とを脱するであろうチャーリーにも色濃く表れている。学校で るのである。そうした知性の希求もやはりヘッドストーンに典 それなりの受け入れられ方をしたいならばこぶしをしまえとい 知性が支配するという近代社会のルールの中で階級を上がって 層中産階級は、ここでも知性など歯牙にもかけず、 いだろう(そして、人目を気にせず傍若無人たる上流階級、 忘却するために対極に位置する代替物として用意されているの た不安と無縁なものとして描かれる。また、こうした暴力性を 由来していると考えられる。だからこそ上層中産階級はこうし 中産階級的な知性と振る舞いとであることは言うまでもな 自らの暴力 そうし

また、 酷い拷問を受けていた」と表現されている。次第に「怒りに溢 をやはりヘッドストーンが伝えている。怒りを押し殺して落ち 第一一章)、実は、 に泣くのを我慢している子どものよう」な仕草を見せ(第二部 着きを失うヘッドストーンは、「まるで痛い目にあっているの しおおせて安心するどころか、むしろそれに苦しんでいる様子 過去から継承している内なる暴力性について、それを隠 悪霊に 「馬の拍車で蹴飛ばされ、 鞭打たれ、

生を始める契機には、 内なる暴力性の前には自分は耐える者でもあり、自ら選ぶとこ 事件において、ヘッドストーンは明らかに加害者であるものの、 従って、相手に対して勝手に募らせた恨みから引き起こす暴力 ドストーンの凶暴性が目立つためにともすると忘れられがちで らかにして遺産を相続するタイミングで今度は暴力を加える側 れて瀕死の体験をするという洗礼を経ている。 づくほど、本来の自分に返りつつ生きる実感を得ているのであ とわない精神状況に至る(第四部第七章)。そして、暴力に近 ストーンは、暴力性のために自らが暴力の対象になることもい 版②)。さらに、ナイフをいじりながら誤って手を切るヘッド ろなく湧き起こるパッションの被害者の位置づけでもある りに苦しむ心を快楽と感じるマゾヒズムを自覚しているのだ。 を覚え始め」てゆく(以上、第三部第一一章)。 れる自分の心に刺激を与えてみて、うずくことに倒錯的な快感 ある。また、ベラがいらいらを募らせ、 しく鉄拳をふるわせるのは初期以来のディケンズの常套でさえ いる者を悪党に限定せず、 に立ち、ウェッグに暴力的制裁を下すのである。本小説ではヘッ ハーモンが素性を隠して遺産と無縁の名もなき人物としての人 面化が階級間移動に関連して登場していることは興味深い。 また、ヘッドストーンに限らず、本作で暴力やその抑圧の表 同時に、いよいよ自分の元々の階級に回帰してもいるのだ。 ハーモンもまた十分に暴力的である。 帰国時に襲撃を受けてテムズ川に落とさ 正義を担う中心的な登場人物にも等 時に発散するのは、 暴力的手段を用 そして素性を明 すなわち、 **図** ボ



図版②「カインであるよりアベルであれ」(第 4 部第 7 章、マーカス・ストーンの挿絵、初版) 苦しむヘッドストーン。

それに関して自分の社会的立場が強いる暴力を抑圧し続ける日

抑圧への罪悪感の反映がある。

実際に手を上げるかどうかに

能性へ

の不安と、

0)

わらず、

こうした自分に内在の暴力性の可

身が抱いたはずの、 昇しながらもそもそもの出身階級を承知しているディケンズ自 体上の犠牲に置き換えられて表現されている。 も寄与するのである。 をふるった張本人以外についても、上層中産階級と労働者階級 分はあの二人 [レイバーンとリジー] を引き裂こうとして危険 されていよう(第四部第一章)。また、ヘッドストーンが「自 く自分に似合って」しまうことにも労働者階級への回帰が示唆 がしていたのに、この今の服は本来の自分の服のようにまさし 分の服装をしているときにはいつも他人の服装を借りている気 もそう考えるに至らせたものとしてボフィンを恨むのである フィン家に招かれる際、 の動因として暴力は機能しており、 の結婚というおよそ異例な階級的関係性を作り出すのに皮肉に と自身で振り返るように な賭に打って出たが、実は二人を結びつけてしまっていたのだ」 イダーフッドの服装を模して船頭服に着替えて、「教師用の自 なければよかった」と言い、ウィルファー夫人もラヴィーニア 、第二部第八章)。 ヘッドストーンは、 努力で勝ち得た立場を追われてゆくが、 階級移動がきっかけになっている。ベラは「帰省などし 階級上昇の持つ無理強いやそれに伴う社会 ここでは人が階級間を移動するに際して ウィルファー家に帰省する際と、 (第四部第一五章)、この事件は暴力 階級の移動に伴う犠牲が身 暴行事件を起こした日を 階級を大きく上 暴行の嫌疑をラ 場の

> 常 こそが中産階級に特徴的なものとして描かれているのである。 そして、 暴力をきっかけとした階級移動の危機というもの

第三節 中産階級に残像として映る傷跡に充ちた世

死ぬまで消えないそうである」という語りも過去の 監禁を経験した人、ぞっとするような苦境をくぐり抜けてきた 生み出した現在なのである。 かるハーモン家の資産もまた、 と位置づける ン上空に死の世界を見てそれを下界の街よりも気分の良いもの 強調し 章がウォット・タイラーを殺した短剣のデザインであることを 群れを囚人になぞらえる(第三部第一五章)。ロンドン市の紋 「死の影が漂う喪服姿をしている」と形容し、そこを歩く人の 水上の墓場として描写し、ロンドンのシティ区を「陰鬱で灰色」、 積が作り出した場所として描き出す。テムズ川を死体が流 なくとも、ディケンズは小説の語りにおいて、 出した今現在の時間が、中産階級には見えているのである。 は世界はどう映っているのか。 り上げていたが、では、 痕跡と共にある後の時間を問題にしている 先に見たとおり、 自己防衛のために殺人をした人の顔からはその体験の (第四部第一章、 (第二部第五章)。 労働者階級は暴力が日常の大きな 暴力とは手を切ったはずの中産階級に 図版③)、ジェニー・レンは、 「とある本が語るとおり、 街の死骸である廃棄物の蓄積が やはり、 物語の核であるボフィンが預 暴力とその結果が作り 世界を傷跡の累 (第一部第一六 出来事とそ 部 を作



図版③「ロンドン市の紋章」 白地の赤十字の左肩部分に赤の短剣が 描かれている。農民一揆を指導したウ ォット・タイラーをロンドン市長が刺 殺した際の剣を描いたとされて、ディ ケンズもそう信じていたが、後になっ て実はタイラー以前にも剣は描かれて いたことが分かっている。

ここにある世界観は、

それぞれ緩急、起伏を経て結局は同じ終着へ向かうのだと語る。章)。加えて、汽車の視点から見る川や水路を人生になぞらえて、

各々の人と物が消費され続ける世界、

ていて、やがて屍として次の時代の土台をなすのである。であって、我々は今も危険に囲まれて使い果たされるのを待っつの終末論なのである。それと同時に未来にも永続する終末論去の消費の残骸の上に築かれているのが現在の世界という、一

その意味では、中産階級の生活を必ずしも暴力が取り囲んでといる方に関する現在を可能にしているからである。おが屑だ中産階級に属する現在を可能にしているからである。おが屑だ中産階級に属する現在を可能にしているからである。おが屑だけを食べて得たウェッグの声やヴィーナスの工房と同じような、暴力の痕に囲まれているのは中産階級も同じなのである。 しかし、中産階級の日常を取り囲む暴力が飽くまで痕跡として、過去のものとして語られる傾向にあるだけではなく、もうて、過去のものとして語られる傾向にあるだけではなく、もうで大きく異なっているのは、その語り方である。暴力が取り囲んでである。

れを評して「昔の教師がチープサイドでレジナルドに出会ったながら丸い小男で子どもの天使のような容貌をしているが、そる。レジナルド・ウィルファーはすでに初老で一家の主でありディケンズのユーモラスな語りの中に、実は暴力は頻出す

の直接的描写を省きながら語られるのである。時にユーモアで包まれ、時に時系列がずらされ、

時にその場面

じりの中で直接的暴力表現を回避している例は他にもある。

X

構え」を見せる(第四部第一二章)。 ばかりの赤ん坊のベラは「両手のこぶしを握ってボクシングの 続いていくのである。ベラとジョン・ハーモンの間に産まれた の家庭にも暴力の萌芽は残存したままであり、これは未来にも 内の軋轢の末の現在を伝えている。ごく普通の平和な中産階級 至っていることを充分に想像させるのである。また同じくユー 談としての架空の中でこの人物の過去にあり得た暴力を描いて う」と言う(第一部第四章)。現在の姿を描写する大げさな冗 モラスに描かれるウィルファー家のいらつきもまた実際の家庭 いて、少年期に実際にこの暴力を受けて今現在のレジナルドに

らすぐに鞭打ってやりたいという欲求を抑えられなかっただろ

る。

はその衝撃が弱められていると言えるだろう。 時間の長さもはっきりしないものとして語られることで、 むほどである。 り倒されるのを「木こりが木を切り倒している」のだと思い込 そこにいるどれが誰なのかも分からない状態であり、 憶をたぐるかたちで真実が明らかにされるのである。 自分の名前もはっきりとしない意識朦朧の状態で見たことの記 がコーヒーに毒を盛られて、数年とも思われる眠りから覚め、 く語られることになる(第二部第一三章)。それも、 もある。この物語が開始する前の時点でハーモンが帰国の途上 で受けた暴行は、 また、激しい暴行が時系列をずらすことで間接化されること 過去の曖昧な記憶というかたちで、主客の別も、 ハーモンの素性が明らかにされた後でようや 自分が殴 ハーモン それは、 暴力

> られるものの、本人はこれが殴られたのであると最初は認識で るのは、 を避けたい著者が見ようとするもの、 しているからこそである。従って、 階級に属するこの作品の読者とこれを語る著者が暴力性を忌避 人物が暴力性を忌避するからというだけではなく、 るのは、ここまでに説明してきたような中産階級に属する登場 るのである(以上、第四部第六章)。こうした間接化が行われ ンとしては現れず、レンへの被害報告を通じて読者に伝えられ まれ背中をステッキで暴打されるという出来事も、 に入っては来ておらず、 チーフだけが認識されていて、 きない。加害者が誰なのかについても、視界に入る赤いネッカ 激しい音がして」、視界が歪み、 スでありながら、客観的で具体的な描写がむしろ避けられてい ヘッドストーンによるレイバーン襲撃の場面も、 ラムルによってフレッジビーが口に塩とかぎ煙草をねじ込 被害者であるレイバーンの視点から、「骨の砕けるような 傷の跡ばかりなのである。 読者にも伝えられないのである。 あとのことはレイバーンの視野 火花が散るのが見えると伝え 暴力性が直接に露見するの 読者の前に常に見えてい クライマック 直接のシー 同じ

<

中産階級的現実があると言って良い。ヘッドストーンが内なる いている姿にはその典型を見ることができる。しかし、新たに も傷跡として残る過去の暴力性と理想としての知性の狭間に、 たな指針として選ぶのは知性であり文明的振る舞いである。 [暴性を自覚しつつも、 先述のとおり、暴力の代替物として中産階級が自己定義の新 勉学を積み重ねてきたことに自負を抱

知性を代表する教育者としての顔という二つが併置される矛盾 のは、ヘッドストーンの暴力的犯罪を知ったライダーフッドが、 縁が切れるとは限らない。暴力と知性が対称となって合い並ぶ の中で、ヘッドストーンの思考が選ぶのは、「この男、殺して 自己を文明人として定義してくれる知性を希求しても、 ツドストーンが教壇に立つ教室に現れる場面だ。凶暴な顔と 暴力と

教育によって、現在の知性を身につけさせたからである。 躾やディシプリン(鍛錬)によって、時に鞭打ちや忍耐を含む さらに、ヘッドストーンやチャーリーが研鑽を積んで知的文明 やる」という暴力的方法の方なのである(第四部第一五章)。 接な関係を持っている。教師や教育制度や社会全体が要請する 人となった現在に至るまでの、その教育の過程もまた暴力と密

に、

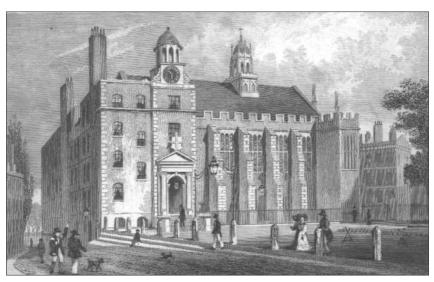
るのが知性と教育であるけれど、その知性を与えてくれた教育 れていて、知性を手にした側によるそうでない者に対する嘲笑 さえ、暴力性に根ざす面があるのである。 でもあるのだ。暴力的世界を覆い隠して次の世界を見せてくれ あるけれど、ジョークに隠れて書き手のスノバリーが同時に現 を笑い、ボフィンの鞭を笑うディケンズの筆はユーモラスでは 知性の希求はディケンズ本人にも見出せる。ウェッグの誤読

肉体性忌避の現代

暴力的であり得るかも知れない自身への危惧の中を生きてい 労働者階級が暴力的環境を平然と生きる一方で、 中産階級は

> た。 暴力への認識を明らかにしたい。 ケンズ本人との関係を詳らかにすることで、 として現在の世界を支えていた。 中産階級の現在を作っていた忘れがたい過去の こうした世界観の変遷とディ 再度、 この時代の 暴力は傷跡

姿は、 とはなく、一八五五年に登録を解除している(図版④)。 ルに法学生として登録をしているが、 て名を成した後である一八三九年になってからミドル・テンプ のである(第三部第一一章)。ディケンズは、とうに作家とし たディケンズがそれでも敵わない階級の壁を感じる姿と重なる はリジーはこの中に匿われているのかも知れないと考えるその に入られるとそれ以上ついて行けず門の前で佇む他なく、 ンズ本人にも充分に当てはめて考えることができるのである。 でも距離の離れた世界へと上昇しようと考える姿勢はディケ ンに見られる、知力と教育とを頼みとして暴力的世界から少し てみると、本小説に描かれるチャーリー、ひいてはヘッドストー 自分が勉強のできる子どもだったことを再三述べているよう 全に腕力に依存した暴力をふるったという話は聞かれていな ると考えていたはずである。ディケンズが家庭の中も含めて完 本人の認識としても自分は中産階級も最下層に属する出身であ い。しかし家の事情で学校を退学せざるを得なかったものの、 ーッドストーンが夜な夜なレイバーンを尾行するが法学院の中 下級海軍吏の息子としての出自を持つディケンズは、 知力への期待と希求があったことは明らかである。そうし 持てる知力と勉学の努力で可能な限りでの成功を手にし ついぞバーに招かれるこ 恐らく



図版④「ミドル・テンプル」(トマス・シェパードの版画、1830 年頃) ロンドンに 4 つ存在する法学院の一つ。

られ、

これから自分がどうなるのか分からず、

迎えの呼び出し

おいてデイヴィッドがヤーマスからロンドンのとあるインに送て行っていて、例えば、『デイヴィッド・コパフィールド』にこうした暴力の持ち込み方をディケンズは初期作品から一貫し

ることである。例えば先の警察留置所で体当たりする女のよう果を描くとき、本作ではその用い方に二つの方法が混在してい

注目に値するのは、

ディケンズにとって暴力の兆しやその結

に、生活の背景の一つとして自然に溶け込んでいるものである。

にも誰にも応じないという場面がある。

ないかと言っていた。(第五章)はその子の首に首輪をはめて馬小屋にでも繋いどけばいいじゃ誰もが表情すら変えない中で、ゲートルを巻いた片眼の男だけ不安げに周りを見回してみた。しかし、呼び出しの声に周囲の

婚式は父ウィルファー氏のみが伴って秘密裏に執り行われる婚式は父ウィルファー氏のみが伴って秘密裏に執り行われるのは、例えば、ロークスミスを名乗るハーモンとベラの結びの一部としての暴力なのである。そうしたあまり必然性や取り立てて意味を持たない、しかし環境の中に当たり前にあるがロテスクを、『互いの友』の中にもところどころ持ち込んでいるのは、例えば、ロークスミスを名乗るハーモンとべラの結びの見知らぬ男は、デイヴィッドにとって勿論不気味であり、この見知らぬ男は、デイヴィッドにとって勿論不気味であり、

合うのである

る。ウェッグは、自らの乱暴な発言も併せ、要するに暴力が似ると、ウェッグも実はこちらに属するもので、そもそも暴力的ると、ウェッグも実はこちらに属するもので、そもそも暴力的ると、ウェッグも実はこちらに属するもので、そもそも暴力的が、もう一人の参列者として偶然居合わせた退役軍人がいて、が、もう一人の参列者として偶然居合わせた退役軍人がいて、

わけにはいかないのである。そうした意味で、時代全体として性はいよいよ意識されるものであり、自然な背景として認める様となる近代という時代を迎える段階において、こちらの暴力級に属している段階において、時代背景的にはその中産階級が歳となる近代という時代を迎える段階において、こちらの暴力様となる近代という時代を迎える段階において、こちらの暴力様となる近代という時代を迎える段階において、こちらの暴力様となる近代という時代を迎える段階において、こちらの暴力である。そうした意味で、時代全体として環境というはいるいのである。そうした意味で、時代全体として環境というはいいのである。そうした意味で、時代全体として環境というない。

て自己定義しようとするあらゆる者に関係があるのである。観念は、同時代の中産階級全員、その後の時代の中産階級としケンズのみの話ではない。自らの内なる暴力性にまつわる強迫なものとして、本作に隠蔽されつつ描かれているが、ひとりディ

注

を登場させている。この場面同様、階級転覆に際しての拷問に用い1 ディケンズは『二都物語』においても拷問の方法として砥石

られている点は興味深

る版も少なくない。ケンズ版」全集での誤記以来「グリダリー」の名前で表記されていケンズ版」全集での誤記以来「グリバリー」であるが、「チャールズ・ディー

取り上げており、ここでも退役軍人に言及している。
取り上げており、ここでも退役軍人に言及している。
安閣係を求めることは難しいと考えられる。ちなみに、グリニッジ無関係を求めることは難しいと考えられる。ちなみに、グリニッジ無関係を求めることは難しいと考えられる。ちなみに、グリニッジという意味では荒唐めの住居があったので、戦傷兵が多く見られたという意味では荒唐

の乗客の救助に励むことで、近代的市民らしく社会的に振る

の安全が脅かされる危機にあって、自分の原稿を探す前に他

ったことを説明する。

無論、

ヘッドストーン的な意味

小での暴

近代以降の中産階級に顕著

身体性の忌避と忘却は、

が執筆中に遭遇した鉄道事故に言及しているのは興味深い。生的に描くのを戸惑っている。本小説の「後書き」でディケンズは暴力を描きがたい時代であり、だからディケンズの筆も直接

命